

I 経営の重点に関わること

評価段階（A：よくできている B：概ねできている、C：あまりできていない、D：できていない）

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
心豊かでたくましい子	「やってみよう」「もっとやってみよう」と心を動かす	「やってみよう」「もっとやってみよう」の思いや、これまでの経験をつなげ遊びを展開している	子どもたちはやってみたいという思いをもって遊び、片付ける時には「明日も続きをしよう」と翌日も遊びが続く姿が見られている。「前はこうだった」と今までの経験を活かし、友達と一緒に遊びを進めている	A	A	・子どもたちの発想を大切にし実現させる手立てを考え、発達に応じてできた体験をさせている	・引き続き教材研修や園内外の研修での学びを活かし、やってみたいと思い繰り返し遊べる環境を作っていく ・伝えることが難しい子に対しては個別に対応し、伝えてよかったと思えるよう肯定的に受け止めていく ・子ども同士思いを伝える場では子どもたちの話を聞いていき、友達の良いところを保育教諭が言語化していく ・異年齢の交流は園庭の使用の方法や散歩計画など話し合い、見通しを持って計画的に進めていく ・園庭の使い方を工夫し、子どもたちの発達に合わせながらも、学年ごとではなく異年齢でかかわる時間を意識的に作っていく
		友達と思い伝え合い、共感したり、自分とは違う意見を聞き様々な考え方があることを知る中で友達の良さに気づく	自分の思いを伝えたり友達の話を聞き一緒に遊ぶ中で、友達の良いところに気づく子が増えてきている。しかし、友達に思いを伝えられなかったり、自分の思いを伝えることができるが友達の話を聞くことが難しい子もいる	B	B	・Bの項目になっている友達の話を聞くことは小学生でも難しい。評価は永遠のBになる項目だと思う。常に課題意識をもち、より良い方法を探る必要がある	
		異年齢の友達と一緒に繰り返し遊ぶ中で、思いやりや憧れの気持ちを持ち「やってみよう」と様々なことに挑戦する姿が増えている	一緒に園庭で遊んだり散歩に行く中、年上の子の姿をみて自分もやってみたいという思いを持ち真似をすることで遊びが広がっている。また、年下の子を楽しませたいとお化け屋敷に招待したり、発表会の劇を見せ合ったりして交流する姿が見られた	A	A	・状況に応じて友達との距離感を縮めたり、離したりしている。自分の思いを伝えることが難しい子もいるが、スモールステップで、改善していくしかない	

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
1こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	子どもの発達や経験などを十分に把握し、発達のつながりやその子らしさを職員間で共有し、一人一人に合わせた適切な援助を行っている	公開保育の事前研修などでも各年齢の発達を押さえ、必要な活動や援助を確認していった。話し合いの場で子どもの姿を共有したり、意見を出し合ったりしたことで、子どもの育ちを見取りその子に合わせた援助をしている	A	A	・子どもに関わることは、半分保護者も関わっている。保護者が、安心して任せられるようこども園で何をやっているのかを理念とともに発信していき、アピールすることが大切。保護者の応援は力になる。応援団を増やしていく	今後も教育課程を押さえ、発達や必要な活動・援助を確認し、実際の子どもの育ちと照らし合わせていく。また、他学年と交流し職員間で情報交換をしていく
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	一人一人の子どもの実態や各家庭の多様性を把握し、職員が共通理解のもと適切な援助を行っている	個別対応が必要な家庭や、外国籍の保護者に対して対応を丁寧に行った。また、職員会議の伝達や報告の場を設け、共通理解を深めた。職員一人一人が対応を意識し、責任をもって適切な援助をしている	A	A	・職員の連携として掲示物を使用して情報を共有していた。職員数が多いので良いと思う	会議などでケース討議を設け、担任以外の職員も援助の仕方を一緒に考えていく。また、来年度に向けて、記録に残して引継ぎを行っている
	(3)環境を通して行う教育及び保育	日々の遊びの過程や変化を見取り、次の日も「やってみよう」「もっとやってみよう」と意欲が高まるような遊びだしの環境や教材研究を行っている	毎朝の環境準備や園内研修での教材研究、園庭環境の見直しなど、今の子どもの姿からどんな素材や用具が必要か考え、準備している。実践したことを写真掲示し、遊びの経過を他の職員とも共有している	A	A	・外国籍の保護者とのコミュニケーションの場を設けたりと多様性の中でしっかりと家庭につながるようにしていた	今後も遊びの面白さを保育教諭と一緒に感じ、子どもの「もっと」という思いがつながる素材や用具など環境をより一層考えていく
2安全管理・指導	(1)事故防止・防災	子どもの居場所確認、子どもの人数確認、職員の立ち位置など、職員間での声掛けを徹底する。また、ヒヤリハットの提出が定着し、月に1回改善策など検討する	園内・園外問わず職員間で連携をとりながら事故防止に努めている。毎月のヒヤリハットの提出が定着しつつあり、職員会議の場で情報を共有できている	A	A	・こども園だけで解決できないことは、保護者や地域を利用して欲しい ・評価はこの通りでよい。評価のA、Bというより園説明や改善策が重要で職員が園評価の内容を理解し共有し改善していくことが大切。Aの中でもAの下や中など細分化し、ステップアップしていくAでよいのではないかな	今年度の減災教育で学んだことを来年度の避難訓練に取り入れて計画していく
3保健管理・指導	(1)健康教育の充実	栄養士など給食職員と連携し、栽培や食育活動を計画的に行い、食への興味・関心を深め家庭へも情報提供を行っている	栄養士と連携し子どもが興味の持てる食育活動を実施したり、保育の中で食について話をする機会を持ち、子どもたちに食育への興味を深めるようにした。また、食育活動の様子をお知らせボードで知らせたり、食育だよりを発行して保護者にも発信していった	A	A		今後も食に興味の持てる活動を取り入れていくと共に、子どもたちが栽培活動に継続的に興味が持てるよう働きかけをしていく
4特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	担当者の保育の公開保育や、少人数で活動を行うトロベアの会を行い、支援方法を検討する。担当者が孤立しないよう職員間の共通理解を図り、学びを支援に反映させている	担当職員が計画に沿って責任を持って取り組み、集団では見えにくい子どもの姿や、それに合わせた支援方法などを話し合うことができた。また、支援方法をクラスや学年の職員と共有し、連携して支援を行うことができた	A	A	・子どもたちは、障害の有無ではなく、その子のパーソナリティーとして当たり前のこととして受け入れていた ・子どもだけでなく、職員に対しても肯定的に捉えていくことで、若い職員が自分から動くようになる	クラスや学年の職員の支援の共通理解はできたので、公開保育の学びを園全体で共有できる機会を作っていく。年間計画を見直し、担当者だけで完結しない方法を考えていく
5組織運営	(1)組織体制の充実	責任を持って各分掌に取り組み、職員間で連携を取りながら、円滑な園運営につなげている	各分掌リーダーを中心に一人ひとりが責任をもって協力しながら計画に沿って進めた。また、分掌担当者だけではなく、園全体で協力し、円滑な園運営をおこなった	A	A	・来園できる保護者だけでなく、来園できない家族にも配信できるシステムになり、家庭を巻き込んだ情報共有ができるようになっていく	今後も各分掌リーダーを中心に責任をもって取り組んでいく。今年度の成果と課題を分析し、来年度の計画を立てていく
6研 修	(1)研修体制の充実	職員一人一人が公開保育や園内研修での学びを日々の実践の中で活かし、重点目標の実現につなげている	全職員が公開保育、園内研修に参加できるようにグループ分けや日程の調整を行った。少人数のグループにしたことで、事後協議など一人一人の意見が出しやすくなり意見交換が盛んになり学びが深まった	A	A	・園で人と接することで、子どもが育っていく。家庭でも携帯を与えて、コミュニケーションがとれないことも多い。園でやっていることを家庭に落とし込んでいくようになる ・理念や信念をしっかりと持っているのが大切。問題が発生したとき、原因の追求・改善を行い、より良くしていくことが前提。その時は、信念に沿って考えていく	今後も引き続き園内研修の方法を工夫する。公開保育の事後研修のまとめ、園内研修の内容など見やすい場に貼りだし職員間で学びを共有するようにしていく
7教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	園内や地域の自然、資源について知識を深め、教材研究を行っている。	登呂公園の自然物に触れて遊んだり、持ち帰って保育や遊びに取り入れたりして、子どもたちが季節の自然の変化や自然に興味を持てるような働きかけを行った。職員が各自教材研究は行っているが、園全体に反映されず知識が広まらない	B	B		園内研修の場で教材研究を行っている。また、身近な資源を理解・活用するためにESDを意識して子どもたちと一緒にできることを考え実践していく
8家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	ICTを活用し、園での様子や子育ての楽しさを発信している 外国籍の保護者で集まり、保護者同士の関係づくりを行っている	ICTを活用して毎日のお知らせボードや連絡帳を写真付きで配信することで、普段送迎しない保護者や祖父母にも子どもの様子が詳しく伝わるようになった。外国籍の保護者を含む保護者の交流の場『とろフレンズの会』を年2回開催し、好評だった	A	A	・年長児の姿を見ると、園の頼りになる存在としてプライドを持って頑張っていることを感じた。小学校では1年生は赤ちゃん扱いしてしまいがちだが、そうではないことを理解し接続について考えていきたい	今年度の登呂フレンズの会のアンケートで要望のあった同学年での集まりを実現するために、4月の保護者説明会の時にともに行い交流の場を作る。2回目以降は秋に計画し親睦が深まるようにする
9近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	近隣の小学校や園との交流を図り、情報交換や研修を進めている。また、子ども同士の交流の機会を作っている	近隣のこども園や小学校への参観を通して、情報共有したことや公開保育の事後研修での学びを持ち帰り、職員間で共有することができた。職員同士の関わりは持つことができたが、子ども同士の交流の機会が少なかった	B	B		小・中学生の授業での訪問があっても、子ども同士の交流を持つことが難しかった。来年度の計画を立てる際には、子ども同士の交流の場を計画していく。また、公開保育に小学校の参加をよびかけていく
10地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	登呂公園での稲作や、近隣への散歩で自然と触れ合ったり、登呂の家訪問や楽寿会の活動に参加し、豊かな生活体験が得られるよう地域との交流を行っている	登呂の家訪問や楽寿の会の方との交流を続けることで、園の活動を知ってもらうことができた。登呂の家では、デイサービスの方だけではなく、入所者の方とも交流をするようになり、子どもたちの元気な姿を見て喜んでもらっている	A	A	・園だけではなく小学校など他と一緒にすることは難しい面も多いと思う	今後も、地域の方と交流できる場を大切にしていき、地域に身近な存在と感じてもらえるようにしていく